

会長時評

「ふれあい集会」方式にこだわった記念行事

多くの島民の参加を

帰島5周年記念事業 実行委員会名簿

浅沼 昶 神着自治会長☆	平松 一成 三宅森林組合長
池田 金好 伊豆自治会長	桑村 健司 三宅社会福祉協議会★
仁平 喜長 伊ヶ谷自治会長	佐藤 就之 住民代表
田中 康祺 阿古自治会長	板倉 則子 住民代表
寺本 恒夫 坪田自治会長	坂上幸一郎 住民代表★
浅沼 基 三宅商工会長	菊地健一郎 三宅連合青年団長★
事務局 政策推進室復興対策係 佐久間 浅沼 鬼海	
☆…委員長 ★…副委員長 (順不同)	

夏休みが終わり、4日には帰島5周年記念行事が開催されます。実行委員会が「ふれあい集会」方式で実施することにこだわったこの行事に、多くの島民の参加をお願いします。

猛暑のおりから、いかがお過ごしでしょうか。謹んでお見舞い申し上げます。今年の夏は、子どもたちの姿が多く見受けられ、桟橋では子ども連れ家族が下船していました。

三宅島帰島5周年記念
感謝と交流のつどい

- 【日時】 9月4日
午前10時30分より
- 【場所】 旧阿古小学校体育館
- 【次第】
- ・挨拶 村長 議長
 - ・来賓祝辞 石原都知事
和田都議長
東京ボラ代表
 - ・来賓紹介 電報紹介
 - ・感謝の言葉
三宅高等学校 代表3名
 - ・第二部
島民と招待者との交流会
(無料 飲食あり)
- ※5日に島内視察など

内地の子どもたちや若者が美しくきれいな三宅島の海を目指して集団で来ている。三宅島は、噴火・地震・台風などの自然の破壊力にさらされながらも、それを上回る自然の回復力に力を得ながら噴火災害10年、帰島5周年の節目の年を迎えました。この5年間は「安全」確保の災害復旧でした。この先からの5年、10年の島のづくりは、くらしの「安心」と産業の「再生・復興」です。

復興支援の弾みに

三宅村は、「三宅島帰島5周年記念 感謝と交流のつどい」を9月4日(土) 旧阿古小学校体育館で挙行政行します。当初村の案では、200人程度の避難先自治体、自治会・団体、ふれあい集会関係

者の招待と島内招待者は各団体長等に限られたものでした。7月8日、村は、この事業に係る意見交換会を避難先団体代表、各自治会、各経済団体で開催。元三宅島島民連絡会の佐藤会長、有馬事務局長など運営委員、地域三宅島の有志で次を提案。「全島民参加型として島を挙げて招待者を歓迎、交流し更に現在ボランティア支援の方々も自費で参加できるようにして、今後の三宅島復興支援への弾みとなる機会とする」など避難中の「ふれあい集会」方式で旧阿古小グラウンドを提案しました。基本的には、この提案が受け入れられ実行委員会です。積極的に参加しよう！

三宅島新報

隔月発行

発行所：三宅島ふるさと
再生ネットワーク
(本部) 〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
Tel. 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

事務局便り

○第3回島市

日時 9月5日(日)

11時～14時

場所 漁協駐車場

皆さま是非お立ち寄りください。

○健康講座開く

8月18日、19日に坪田、伊豆で、及川裕子先生他3人が来島し行った。

○ご寄付のお願い

郵便振替口座

口座番号：00120-3-54036

講座名称：三宅島ふるさと
再生ネットワーク

事務局：あすなる保育園内

郵便番号：173-0005

住所：板橋区仲宿 25-6

電話・FAX 03(3963)5697

担当 横山美紀事務局長

孤独死など避けるために

活性化への取り組みを



伊豆の高齢者宅で清掃活動をする向上高校生（8月）

深刻化する独居者の孤立問題

伊ヶ谷地区では高齢化率約50%に

現在深刻なのは、高齢化の問題だ。島には、噴火前に3千800人以上

いた島民のうち未だに千人ほどが戻っていない。避難前は28%台だった高

齢化率も、若い世代が帰らないため昨年は36%台になり、独居者の孤独死も3件発生した。特に危険だと思われる

噴火災害から10年目の三宅島は、未だに多くの問題を抱えている。その一つが高齢化の問題で、65歳以上の高齢者だけでなく、60歳から64歳までの人たちにも、孤独死などの危険があるという。このような問題の解決には、島民が相互理解をする中で一丸となり、植林ボランティアとして多くの人が島を訪れたり、インターンの若者がいたりするなどの好材料を活用し、島の活性化を図ることが必要だ。

読売新聞 平のさん 「問題の多様化 復興の妨げに」



三宅島の状況取材してきた読売新聞社会部記者の平

のさんは、「島民が抱える問題が多様で、一丸となれないことが復興の妨げになっている」と指摘する。三宅では、高濃度地区に家がある人や観光業や農業、漁業関係者など、それぞれに切実な問題を抱えていて、お互いを理解する余裕がないというのだ。

その背景にあるのは災害の長期化。それぞれの立場でみんな頑張ってきたが、そのような事態を予想していなかったため、上記のような問題への対応が遅れた。避難中に復興への下地づくりがもっとされていたらとも感じるが、基本的には誰の責任でもなく、災害を甘く見ないというのが三宅島の教訓と考えているようだ。

ケアマネジャー 北村淑子さん 危ない60歳～64歳

ただでなく、60歳から64歳までの人です」と話す。特に男性は定年退職後

三宅村指定地域包括支援センターの北村淑子さんは、「孤独死などの危険があるのは65歳以上の高齢者

セーフティネットの形成を

の新しい生きがいを見つけるのが難しく、アルコール依存症になることが多い。島民間の交流が減っているとともに、この年代へのセーフティネットがないことが問題だという。北村さんは、「孤独死を減らすためには、多く

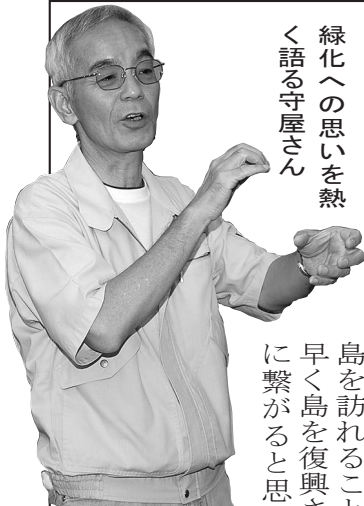


高齢者の現状を話す北村さん

の人が関わられるように地域で情報交換をすることが必要ですが、個人情報の保護などがネックになっています」と話した。

のは、急斜面に家が建ち高齢化率も50%に迫る伊ヶ谷地区や空き家が多い坪田地区など。高齢者の一人暮らしが多い伊豆地区が危険だという声もある。携帯電話が通じない地域もあり、女性に比べ引きこもりがちな男性の高齢者は、家族と連絡

がとれなくなるケースが多いそうだ。この状況に対し、村では現在1カ所しかない「風の家」という高齢者サロンを5カ所に増やすほか、高齢者の全戸訪問調査をする計画を立てているが、具体的に動き出していない。



森林組合事務長の守屋廣次さんは、緑化ボラン
緑化への思いを熱
く語る守屋さん

森林組合事務長 守屋廣次さん 噴火前の植生復活を目指して

三宅島で、年間に2千人以上を受け入れているのが、火山ガスの影響で木が枯れた雄山の緑を復活させるために植林を行う緑化ボランティアだ。

緑化ボランティアは、三宅村森林組合事務長の守屋廣次さんが始めたもの。避難中に島民の雇用対策のために新木場につくった夢農園で、帰島後

に備えて植樹用の木の苗を育てたのが最初の取り組みだった。

緑化ボランティア 年間2千人以上が来島

その後、都立園芸高校に苗木づくりを頼んだことがきっかけとなり、同校の卒業生が帰島後に植樹のボランティアをしたという申し出があった。守屋さんは、同校の卒業生が設立したNPOの園芸アグリセンター

と協力して、避難指示が解除されずからわずか4ヵ月後の2005年6月に、同校生徒やPTA、卒業生など約100人を受け入れた。この様子がマスコミに

と話す。「植林をしなくても、自然の力で

50年あれば山の緑は戻る。ボランティアはあなただけの満足」と話す守屋さん。しかし、「木を植えることで回復にかかる時間を10年短縮でき、その結果二酸化炭素の排出量が減ったり、噴火前と同じ植生を復活させることができたりする

など、その意味は大きい」という。問題点としては、林業とは違いこのような緑化事業には補助金が出ないことがある。現在は災害復興の予算がついているが、「このままでは、植えた木を守る費用を得られない」という。守屋さんは、「このようないくつかの状況を知らなければ、ボランティアの輪を広げたい」と意欲を語った。



雄山の中腹で行われている緑化作業

取り上げられたこともあり、応募の問い合わせが

増えた。今では、「旅職人」という旅行会社が仲介し、年間に約2千人が緑化ボランティアとして訪れているほか、イオンやセブン&アイなどの企業も協力し、これまでに50万に10万本の木を植えてきた。

Iターンに高まる期待 若者が島の魅力に惹かれて



成田信治さん

高齢化が進む三宅島だが、新たに島を訪れるIターンの若者もいる。その一人が、雄山の緑化作業などを行う伊豆緑産の成田信治さん(29)だ。成田さんは、務めてい

「夢は森林セラピーができるようにすること」と話す成田さんは、結婚もしており、一生島で暮らす覚悟をしている。成田さんは、「賃金が安いなどの問題を解決して、Iターン組を増やすことが復興に繋がると思っています」と話した。

★お便り★

今年も向上高校の皆さんと佐藤会長に島の家の掃除をして頂き、ありがとうございます。

雨の中の作業で大変だったでしょうね。きれいになったという連絡を会長から頂いて、嬉しくなりました。島へ行きたいと思いつながりながらも機会がなく、いつか行けたらと島を懐かしく思います。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

(北区 A様)

★ご寄付者名★

吉野文雄様、佐藤就之様、笹井美奈子様、小林方子様、佐藤宗ノ子様、倉持房枝様、小河原武弘様、室崎益輝様、M様

(3月16日～8月15日)
ありがとうございました。

編集後記

この新聞は、8月に島に行った向上高校新聞委員の協力を得てつくりました。

私たちDTPAも三宅島にボランティアに行かせて頂きました。島は緑が増え、海にも魚が多く見られ、確実に復興に向かっていくように思えました。しかし、人工透析機の導入がまだであることや高齢化の進行など、問題が多くあることを知りました。

問題解決のために、この三宅島新報が少しでも力になればと思います。

(DTPA一同)



人工透析機の新しい三宅島の中央診療所(神着)

島になかったために、島でできないことに繋がっていった人工透析機の中央診療所への設置の請願が、6月16日の村議会でも、満場一致で採択された。

人工透析機の導入に関しては、以前から島民の強い要望があり、2009年6月には、島民有志により1238筆の署名が集められたが、村からは1年以上回答がなかった。今回の議決で状況は一歩前進したが、実際に導入されるかどうかは不透明だ。それは、導入の執行権は村長にあるから、村長からはまだ今後どのような対応をしているのかの具体的な意思表示はない。

政策推進室長 佐久間忠さん

「すぐに対応できない」

三宅村政策推進室長の佐久間忠さんからは、人工透析機問題に関し、「すぐに対応はできない」という答えが返ってきた。

それは、他の病気でも帰島できない人がいる中で、透析機の導入だけをするのは不公平になること。また、島民が通常の医療を受けられるように、不足している医師や看護師を確保する方が優先と考えているからだという。

請願が可決されたことに関しては、「導入への道筋を示すことは必要」と話すが、具体的な検討はしていないそうだ。

伊豆自治会長 池田金好さん

「他人ごとと考えずに」



伊豆自治会長の池田金好さんは、奥さんが人工透析

が必要なため別居している。奥さんが島を出たのは2年前。現在は茨城県の娘さんの家で暮らしながら、透析機のある病院に通っている。

池田さんは、「今までとてももどかしい思いをしてきた。機械さえあれば、戻って来られる人はたくさんいます。村は、他人事と考えずに、しっかりと向き合ってほしい」と厳しい表情で話した。

村議会議員 浅沼徳廣さん

「1年半以内に必ず」



2000年噴火が起こる以前から透析機の導入を訴えてき

た三宅村議会議員の浅沼徳廣さん。請願が可決されたものの「現村長や村議の任期はあと1年半なので、それまでに導入しなければ、話は振り出しに戻る」と不安を話す。

浅沼さんは、「居住の自由は憲法でも保障されている。機械がないために、築いてきた財産を捨てて島を出なければならない人がいる現状を解決したい」と語った。

請願議決したけれど...

人工透析機導入 村長の決断望む声が

6月の村議会でも人工透析機の導入の請願が可決された。しかし村長は、この請願にどのように応えるか意思表示をしておらず、透析が必要な人が島で暮らせるかどうかは、まだ予断を許さない状況だ。

島になかったために、島でできないことに繋がっていった人工透析機の中央診療所への設置の請願が、6月16日の村議会でも、満場一致で採択された。